

婦人科検診を 受けるあなたへ

～早期発見・早期治療のために～

監修／北里大学医学部産婦人科助教授 上坊 敏子

女性には、子宮・卵巣・膣・乳房など、妊娠・出産・子育てに必要な女性特有の器官があり、年齢とともに変化していきます。それらにかかわる女性特有の病気が婦人科系領域の病気です。

婦人科の病気の多くは自覚症状にとぼしく、婦人科とは無関係に思える症状でも何らかの形で婦人科の病気とつながっているケースもあります。病状が進むと治療が難しくなり、命を脅かすこともあります。ですから、症状がない場合でも定期的に検診を受けて、早期発見し早期治療することが大変重要です。しかし、近年、婦人科の病気は増加・若年化の傾向にあるにもかかわらず、「忙しくて時間がない」「恥ずかしい」などと検診の機会があっても受診せずにやり過ごしてしまっていることが多く見受けられます。

そこで、婦人科検診に組み込まれる子宮がん、乳がんを中心に、その特徴や検診内容について取り上げました。自分の身体を大切に考えて、機会を逃さずに検診を受けましょう。

【婦人科とは……】

月経やおりものの悩み、子宮、卵巣、乳房の病気、性感染症、更年期障害、避妊、不妊の相談など、女性の幅広いトラブルに対応してくれる科です。産婦人科は、婦人科と妊娠・出産のための検査や治療を行う産科の両方を兼ねた医療機関です。妊娠以外の受診理由の場合、婦人科・産婦人科どちらを受診しても構いません。



子宮がん (子宮頸がん)

子宮がんは子宮の粘膜にできるがんで、子宮の入り口にできる「子宮頸がん」と子宮の奥にできる「子宮体がん」に分けられます。子宮頸がんは子宮がんの55%を占め、30～40歳代の女性に多く見られ、近年は20歳代にも急増しています。

原因は？

子宮頸がんには「ヒトパピローマウイルス」というぼを作るウイルスの仲間が大きくかかわっていることがわかってきました。性交渉によって感染する、いわゆる性感染症の一種です。このウイルスには多くのタイプがありますが、このうちの特殊なタイプが子宮頸がんの原因になると考えられています。ですから、性交渉の経験があれば誰もが罹患する可能性があるのがヒトパピローマウイルスです。

症状は？

初期にはほとんど自覚できる症状はありません。そのため、早期発見のためには定期的に検診を受けることが必要です。少し進行すると、性行為の際の出血、月経でない時の出血やふだんと違うおりものの増加、さらに進行すると腹痛や腰痛が起こることもあります。

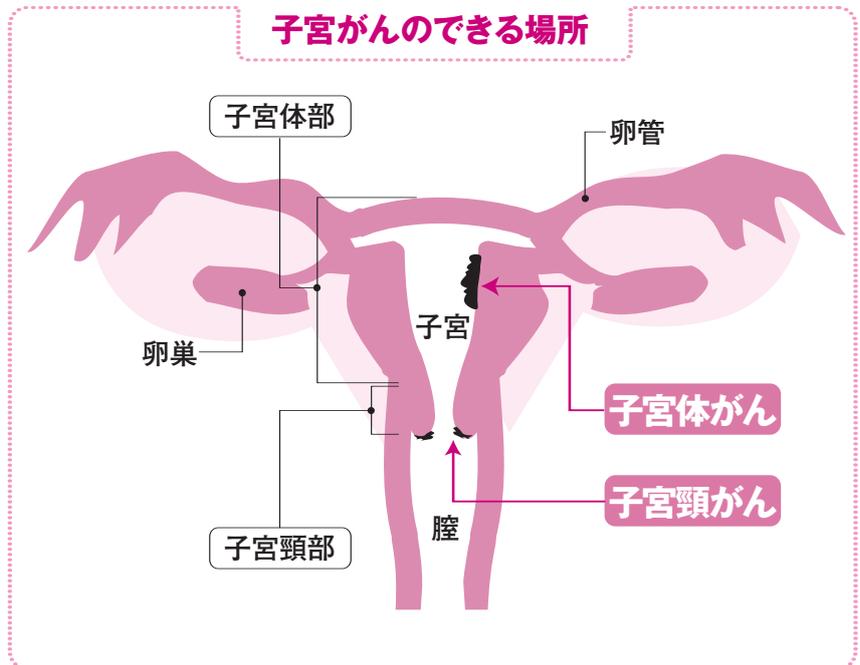


検診は？

子宮頸部の細胞を専用の器具で採取して、顕微鏡で細胞を調べる「細胞診」が行われます。痛みはほとんどありません。子宮がん検査といえば、ほとんどが子宮頸がんの検診です。



子宮がんのできる場所



子宮体がんは自覚症状に注意

子宮の奥にできる子宮体がんには、女性ホルモンのバランスの崩れが影響していることがわかっています。したがってホルモンのバランスが崩れやすい更年期後の50歳代の人に多く見られます。ただし近年は、若い世代でも増えており大きな問題となっています。子宮体がんの危険因子としては、生理不順、妊娠・出産経験がない、肥満などが挙げられます。

子宮体がんは症状がないうちに検査を受けても診断に結びつきにくいので、早期発見のためには自覚症状を見逃さないことが重要です。子宮体がんはごく早期から「不正性器出血」が現れるのが特徴です。また、おりものの異常や下腹部の痛みなどが現れることもあります。このような症状がみられた場合は、いち早く婦人科を受診するようにしてください。

乳がん

母乳を作るための分泌腺が集まってできた乳腺組織にできるがんです。日本人の女性に起こるがんの中で最も多く、年々増加傾向にあります。患者数は30歳代後半から急激に増え、40歳代後半にピークを迎えます。

原因は？

乳がんの原因としては、女性ホルモン(エストロゲン)の過剰な分泌が関係していることがわかっています。また、タンパク質や脂肪を摂りすぎる欧米型の食事も問題視されています。危険因子としては、初潮が早く(12歳以前)閉経が遅い(55歳以上)、家族に乳がんにかかった人がいる、30歳以上で出産経験が少ない・もしくはない、肥満などがあげられます。

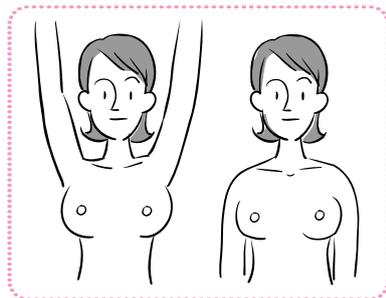
症状は？

乳房に触れてわかるしこり、乳房のへこみ、乳頭からの異常な分泌液などが初期症状です。日頃から自分の乳房の状態を知っていれば異常も発見しやすくなりますので、月に1度のセルフチェックを習慣にしましょう。排卵後には乳房が張ったりするので、月経終了後5~7日くらいの間に行ってください。

●自己診断法

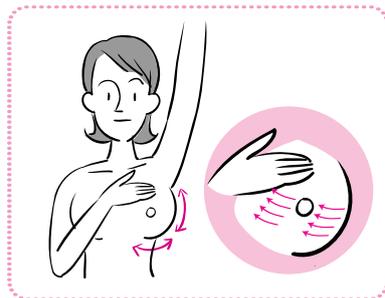
①鏡の前で乳房を観察する

乳房の形、ひきつれ、くぼみ、ふくらみ、左右の乳頭の位置などをよく観察する。腕を上げた状態と下げた状態で行う。



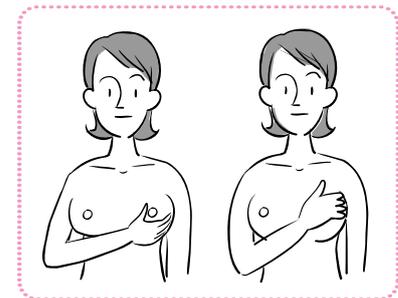
②乳房をさわってチェックする

石鹸などをつけて、親指を除く指をそろえて指先の腹側を乳房にすべらせる。押し付けたりつまんだりしないで、やさしく行う



③わきの下のしこり・乳頭からの分泌液を確認する

わきの下にしこりがないか、乳頭から異常な分泌液が出てないか調べる。



検診は？

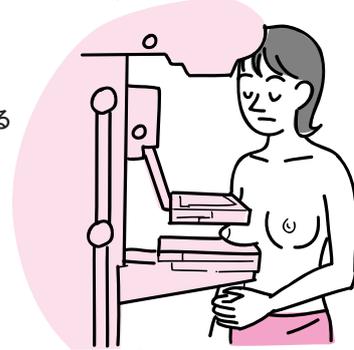
自己診断は大切ですが、やはり定期的に医師による検診を受けることが重要です。視診や触診のほか、「マンモグラフィー」「超音波検査」の2種類の画像検査があります。それぞれの特徴をご紹介します。

●マンモグラフィー(乳房を上下と左右から挟んで行うエックス線検査)

- ・しこりになる前のごく早期の細かな石灰化の集まりを発見できる
- ・乳房全体の変化をみるのに適している
- ・乳腺が発達した方(30~40歳代)の場合、全体が白く写るため判定が難しい場合がある
- ・乳房を引き伸ばすため多少痛みを伴う
- ・厚生労働省からの推奨もあり導入が全国的に進んでいる

●超音波検査(乳房に超音波を当て、乳房内の様子を画像化する検査)

- ・特に小腫瘍型乳がんの発見に有効な検査
- ・乳腺の濃さに影響されないことから、乳腺が発達した方の画像化も容易
- ・乳房を圧迫する必要がなく、痛みもない
- ・自治体の乳がん検診などではあまり行われていない



●マンモグラフィー



乳房のしこりのすべてが乳がんではありません

乳房にできるしこりには、「乳腺症(30~50歳代に多い)」や「乳腺線維腺腫(15~30歳代に多い)」といった良性の腫瘍もあります。乳房にできるしこりの8~9割は良性といわれています。ただし、乳がんと鑑別することが大切なので、しこりに気がついたら必ず受診し検査を受けましょう。

※乳がんの専門は「乳腺外科」「乳腺科」「外科」です。産婦人科ではありませんのでご注意ください。

その他の婦人科の病気

自覚症状や気になることがあったときには迷わず医療機関を受診しましょう。自覚症状のない病気も多いので定期的な検診を受けることも大切です。



子宮内膜症

子宮の内側にある子宮内膜が、子宮外の部位にできる病気です。30～40歳代に多くみられます。普通、子宮内膜は一定の周期で増殖し、その後はがれ落ちて血液とともに体外へ出ます(月経)。子宮外に増殖した内膜にも月経と同じ変化がおきます。しかし、子宮内と違って排出口がなく、その血液がたまって腫瘍を作ったり、周りの臓器と癒着を起こしてしまいます。

●注意が必要な自覚症状…だんだん強くなる月経痛、月経後も続く下腹部痛、月経時や前後の排便痛や腰痛、性交痛、不妊

子宮筋腫

子宮を構成する平滑筋という筋肉が異常に増殖し、こぶのような塊(筋腫)となる良性の腫瘍です。婦人科の病気の中で最も多く、35～50歳が最も発症率が高くなっています。症状がなければ特に治療の必要はありません。症状は筋腫のできる場所や大きさによって異なります。

●注意が必要な自覚症状…月経過多、月経痛、下腹部痛や腰痛、不正出血、頻尿や便秘、不妊

卵巣のう腫

卵巣は親指ほどの小さな臓器ですが、身体の中で最も腫瘍ができやすいといわれています。そのうちの9割を占めるのが良性腫瘍の「卵巣のう腫」です。のう腫ができていても小さいうちは自覚症状はありません。婦人科での診察や超音波検査で診断します。

●注意が必要な自覚症状…腹部のはり、腹部のしこり、腹痛、腰痛、頻尿、便秘

卵巣がん

卵巣にできる腫瘍のなかで悪性のものが卵巣がんです。初期には自覚症状が現れないことが多く、身体の中にある臓器のため早期発見が難しい病気です。特に40～50歳代に多く、妊娠・出産の経験がない女性に多いという特徴があります。欧米人に多く見られましたが、日本でも年々増加傾向にあります。

●注意が必要な自覚症状……腹部のはり、腹部のしこり、腹痛、腰痛、頻尿、便秘(初期には症状がない)

性感染症に注意

性感染症は、性行為によって性器クラミジア、性器ヘルペスウイルス、尖圭コンジローム、梅毒、淋菌およびHIVなどに感染する疾患です。最近、特に若い女性の罹患患者が急増しているのは、性器クラミジア感染症。自覚症状がない場合が多く、放置すると骨盤内感染症、不妊症、子宮外妊娠等を引き起こす可能性があるため注意が必要です。

性器周辺の異常(かゆみ、痛み、発疹、ただれなど)、おりものの異常(色、においなど)、排尿時の異常(痛み、灼熱感)といった自覚症状がある場合は、すぐに婦人科を受診しましょう。血液検査や膣分泌物検査で診断できます。また、HIVへの感染を調べる検査は、全国のほとんどの保健所で匿名・無料で受けられます。

予防について、コンドームの使用は避妊のみでなく、性感染症の予防においても極めて重要ということを認識してください。



検診で異常が指摘された時には、必ず再検査を受け、
医師の指示の元いち早く対処しましょう。